

「どんなに頑張っても豊かになれない」
—
急激に拡大し続けるネットカフェ難民、
中高年フリーター、非正規雇用問題。
この深刻な実態は、我々に何を提起しているのか？

【シリーズ企画】

ニッポンの



●ルボ 山川敦司 (元ボクサー)
「ワーキングプア」という悲劇



現実

格差社会が生んだ「影」

三浦展 (マーケティング・プランナー)

「貧困の固定化」に
どう対処するか

谷合正明 (参議院議員・公明党青年局長)

ワーキングプア という悲劇。

「どうしてこんな状況になってしまったのか」——。女性、若者、そして中高年に迫る、厳しい現実。



©共同

山川敦司

やまがわ・あつし (ルポライター)

働けど働けど、 非正規雇用の悲劇

夕方から降り出した小雨が本降り
に変わった。ここは終電車間際の東
京・蒲田。

駅に向かう人並みを縫うようにし
て、ひとりの女性が繁華街に向かっ
て小走りに駆け抜けていく。

肩にかかるブラウンの髪。白い丸
首セーターの上からベージュのパー
カーを羽織り、下はジーンズ姿だ。

黒い布地のポストンバッグを肩から
掛け、両手には大きな紙製の袋を提

げている。

ふと……女性は一「ナイトバック五
時間九八〇円」と表示されたネット
カフェの看板の前で立ち止まり、た
めらいもなく雑居ビルの中へ消えて
いった。

住居を持たずにネットカフェで寝
泊まりしながら生活する、通称「ネ
ットカフェ難民」——そんな人たちが
急増している。

ネットカフェとは、まんが喫茶を
をはじめとした複合カフェのこと
で、その数は全国で約三〇〇〇店。
大半の店はオーブンスペースと個室
の二種類に分かれているが、個室と
いってもパソコン一台と小型テレビ
が置かれた各ブースを薄い壁一枚で
仕切っただけの空間だ。

店内では軽食のほか、下着や歯
がきセットなどの宿泊必需品も購入
できる。

冒頭の女性・飯島淳子さん（二十

九歳・仮名）が、ここで寝泊まりす
るようになって三カ月がたつ。

雨のためか、この日は早くから個
室タイプが満席になってしまい、空
いているのは、席の後ろが通路にな
っているオーブンスペースのみ。

「これから他を探しても、個室が確
保できる保証はないですから……。
ま、マックで寝ると思えば、こっち
のほうがずっとましですよ」

彼女はぼつりと行って、寂しげに
微笑んだ。

ネットカフェにも入れないときは
ファストフード店で、朝まで過ごす
ことも少なくないという。

店内の時計はすでに一時半を指
し、満席のフロアからは、パソコン
のキーボードを叩くカチャ、カチャ
という音に混じって、人々の寝息が
聞こえてくる。

ほどなくして、彼女も机に突っ伏
したまま眠りについた。傍らには飲

みかけのココアが置かれていた

。 淳子さんは埼玉県出身。両親共に
教師で、六歳の離れた姉がいる。

淳子さんが都内の大学を卒業した
のは、二〇〇〇年三月。……統計史
上初めて就職率が六〇％を下回った
「超氷河期」だった。

銀行や証券会社を中心に五〇社以
上回ったものの、内定が出た会社は
一社だけ。しかも志望していた金融
とは関係のない、コンピュータの関
連会社だった。ところが、

「二月に入って突然、内定の取り消
しの電話が入って……理由は親会社
が経営不振になったということ、
謝罪の言葉もありませんでした」

二カ月間、ハローワークに通い、
ようやく見つけたのが小さな広告制
作会社だった。

「といっても正社員ではなく、一年
間の契約社員です。仕事は制作のア

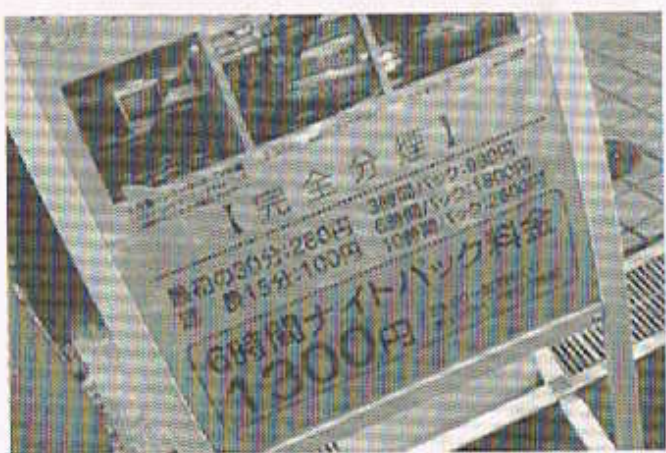
シスタントで、それなりにやりがいのある仕事でした」

二五日勤務で月収は一三万円。ところが、半年ほどして、先輩の契約社員が三人立て続けに退社。

「途端に企画の資料集めからコンペのデータ作成まで、三人分のしわ寄せが全部、私に回ってきてしまっただけ……」

手当の付かない残業が増え、帰宅は連日深夜になったが、それでも歯を食いしばって働き、翌年には契約を更新。給料は一万円増えて一四万円になった。

「でも正直、こんなに働いて、たった一四万？ っていう感じでしたね。これじゃ、学生時代のファミレスのバイトと同じ。派遣ですからボーナスもありません。このままいたら、ホント、殺されちゃうんじゃないかと思って、とにかく辞めるしかない、と思ったんです」



「住居喪失不安定就労者等の実態に関する調査」によると、住居を持たずにネットカフェに寝泊まりしている人の数は、全国でおよそ五四〇〇人。うち男性は七七・九割、女性二二・一割で、二十代が全体の約半分

その後は訪問販売やショップ店員などの仕事を転々としたが、「結局、正社員になれずに待遇は派遣社員どまり。それどころか、夏からは短期のアルバイトもなくなってしまったんです」

昨年八月、三カ月の家賃滞納でマンションにいられなくなり、友達の家を転々とした後、ネットカフェで寝泊まりするようになった。

「世間体を気にする親は、娘がこんな生活をしていることを周りに知られたくないみたい。だから、電話で話すことはあっても、帰ってこいとは言いません」

現在は行きつけのネットカフェを「ローテーション」しながら、日雇い派遣の仕事をして生計を立てている。所持金は、二万五〇〇〇円ちょっと。

「もともと小食なので、基本的には」と。

一日一食。お金がないときは、デバ地下の試食で済ませることもあります」

この日の食事もコーンスープとクッキーだけだ。

「同じ年の友人がどんどん結婚して母親になっていくというのに、私は一体何をやっているんだろう、って思いますよ。ほんの少し卒業する時期が違っただけで、どうしてこんな目にあわなければいけないのか……完全に社会から取り残されてしまった感じです」

今年はまだ三十歳。この先、人生をどうやって立て直していいのかわかりません」

淳子さんは遠くに目をやって、ぼんやりと呟いた。

急増する ネットカフェ難民

昨年八月、厚生労働省が実施した

ところが、九九年以降労働者派遣法の相次ぐ改正で、〇四年には製造業への派遣も自由化され、以来多くの企業がこぞって、派遣社員を受け入れるようになった。非正規雇用は企業にとって、人材育成のコストがかからず、人件費を低く抑えられ、利潤を生む労働力としては都合がいい。

仙台市内でビル清掃のアルバイトをしながら生計を立てる野口幸男さん（三十五歳・仮名）も、一〇年以上、非正規雇用の仕事を渡り歩いてきたひとりだ。

野口さんは宮城県の山間部にある小さな集落で農家の五男として生まれた。父親は彼が幼少の頃、病気で他界。代わって九歳年の離れた兄が母を手伝い、農業をしながら一家を支えてきた。

しかし――。

「三〇ほどあった民家も、とどんど

過疎化が進んで僕が中学の頃には、うちを入れて全部で七世帯。周りも、ほとんど耕作放棄地になってしまい、もう農業で食べていけないような状態じゃなかった」

工業高校に進学した野口さんは卒業後、県内のプレス加工会社に住み込みで就職。手取り一〇万円の中から半分の五万円を実家に仕送りしていた。

ところが、二年たった冬のこと

「仕事仲間に借りた車で、自転車に乗ったばあちゃんを撥ねてしまったんです」

しかも、酒気帯び運転だった。

辛い相手の怪我はかすり傷程度ですみ、一五万円の示談金を払って警察沙汰になることは逃れたが、

「田舎のことですすからね。あつという間に噂が広がってしまつて……」

勤め先からは即日解雇され、さり

とて実家に帰ることもできずに、仙台市内の友人宅へ転がり込むことに。

そこで見つけたのが「月収三〇万円 正社員登用制度あり 寮完備」という就職情報誌の広告だった。

意を決した野口さんは請負会社を経て、福島県にある家電メーカーの工場にて非正規雇用の請負労働者として働くようになる。

「最初の頃は昼夜二交代制で、一二時間拘束で目いっぱい働かされたこともありました。途中からメーカー側の都合で労働時間がまちまちになり、ひどい時には午前中だけで作業中止なんていうこともあって、そこから社会保険、寮費、光熱費を引かれると手取りは一〇万を切るような有様で……」

非正規雇用の契約形態は大別すると派遣と請負に分かれるが、製造業の場合は依然として請負業者からの

派遣が大半を占める。

が、請負会社については規制する法律がないため、「月収三〇万円可」などの誇大広告がはびこり、またサンな管理で労働者を雇用しているケースもあり、トラブルが後を絶たないという。

「以前、寮で一緒だった人は契約期間内に怪我で仕事ができなくなり、時給を三割カットされたし、僕自身、山梨県の建設現場で足場から落ちて頭から出血したこともありましたが、「しばらく寝ていれば治る」と救急車すら呼んでももらえませんでしたからね。病氣や事故にあつて病院に行つても費用は自己負担。もちろん解雇されても失業手当なんてありませんよ」

こんな劣悪な雇用環境の中で、彼は二十代からの十数年を過ごしてきた。

この間、野口さんが契約した請負

会社は全部で五社。赴任した工場も福島や栃木のほか、愛知、岡山、広島など二十数カ所にも及ぶ。期間は最長で二年半。最悪では一カ月に満たないこともあった。

「中には契約期間中に、工場の稼働

停止を理由に赴任した翌日、いきなり解雇されたこともありまし

路上生活で迎えた 35歳の誕生日

全国を渡り歩き、一年ほど前に上京した野口さんだが、体調不良から仕事に就けなくなり、サウナやネットカフェなどを経て、昨年の春、路上生活のまま三十五歳の誕生日を迎えた。

「一生懸命働いてきて、最後に行き着いたのがホームレスですからね。確かに酒を飲んで事故を起こしたのは自分の責任なんですけど、ここまで人生が変わるなんて……。あの交通事故さえなかったら、と思うと悔やんでも悔やみきれません」

野口さんは健康保険証を持っていない。路上生活時代にバッグごと洗いや盗まれてしまったからだ。「そりゃあ、再発行したかったです

よ。でも、そんな金、どこにありますか？」

保険料滞納で保険証を失ったため、風邪を引いても病院に行くこともできない。

厚生労働省の調べによると現在、国民健康保険料の長期滞納を理由に保険証を使えない「無保険者」は全国で三〇〇万世帯以上。

途方にくれた野口さんは、薬にもすがらないで三カ月ほど前、区役所に生活保護を申請した。

ところが、窓口の担当者も、「まだ若いんだから、働けるはずだ、の一点張りだね。でも、現実問題、体が思うように動かないし、住む場所もない、にっちもさっちもない状態だった。で、係の人に「このまま死ぬと言うんですか？」と訴えたら、山谷に行けば、とりあえず仕事にありつけるはずだ、と言われて……。ほんと、バカにされ



たものです」

九〇年前半のバブル崩壊後、六〇万前後と推定されていた生活保護世帯は九九年では七〇万を、〇一年度には八〇万を突破。〇六年には約一〇〇万と過去最高を記録した。そのため働けることを理由に、生活保護が適用されないケースが増えている。

結局、野口さんは先月、宮城に戻り、兄に身元保証人になってもらい、簡易宿泊所で寝泊まりしながら働いている。

リストラから中高年 ワーキングプアへ

懸命に働いても生活保護水準以下の賃金しか得られないワーキングプアの人々。有識者の中には、「利益を追求する企業と自由を求める若い労働者の相思相愛がフリーターなどの雇用形態の多様化を生み、

それがワーキングプアという層を生み出した」

と指摘する声もある。しかし、こういった事態は何も若者だけに限ったことではない。

中高年の場合には、会社の倒産やリストラを機に突然ワーキングプアに陥ってしまうというケースが少なくないからだ。

水島彰紀さん(四十四歳・仮名)は、二年前まで都内にある印刷会社に勤めるサラリーマンだった。埼玉県出身の水島さんが都内の大学を卒業後、医療機器メーカーに入社したのは世の中がバブル景気に沸く八五年。

「毎月一〇〇万円単位の検査機器がバンバン売れるような時代です。連日、病院関係者への接待で、それこそ胃に穴が空くほどの忙しさでした」

ところが、バブル崩壊と共に経営

が悪化し、会社はほとんどなくなって倒産。知人の紹介で印刷会社に再就職したのは九四年のことだ。

以来一三年にわたり懸命に働き、四年前には千葉県郊外に三〇〇万円で購入したマンションを。妻と息子二人の一家四人で暮らしてきた。そんな水島さんが突然リストラの対象になり、退職を余儀なくされたのは二年前のことだった。

「忘れもしないその年の七月。上司から、たまには昼飯でも一緒にどうかね?」と誘われましてね。連れていかれたのは、高級な飯屋。そこで、いきなりリストラを通告されたんです。選択の余地? そんなものはありませんでしたよ」

猶予期間は一カ月。その口を待つて、水島さんは会社を後にすることになった。ところが、家族にはどうしても、その事実を告げることができない。

「毎晩、今日こそ話さなくては、と

思うんですが、どうしても女房と子供たちの顔を見ると言い出せない。本当に地獄のような日々でした」

毎朝、妻に見送られて子供たちと一緒に家を出る当たり前の日常が、



どれほど幸せだったことか。

そんな思いを胸に水島さんは、三カ月の間、近所の図書館や公園などをぶらついて時間をつぶした。

しかし、いつまでも隠しておくわけにはいかない。子供たちが寝静まったあと、水島さんは意を決して妻に切り出したという。

「俺、実はリストラされたんだ」

「……」

しばしの沈黙が流れた。

しかし、返ってきた言葉は、「長い間本当にご苦労様でしたわね。」

おとうさん、ありがとう」
その言葉を聞いた途端、張り詰めていた何かがブツンと音を立てて切れた。気がつくとき水島さんは、声をあげて泣いていたという。

「会社から、もういらぬ」と言われたとき、俺の人生はなんだったのかって、死にたいくらい落ち込みましたからね。しかも育ち盛りの子供

たちを抱えて、生きていくことを考えると頭が真っ白でしたから。本当に女房の言葉に救われたような気がしましたよ」

とはいえ、現実から逃げることはできない。水島さんは、翌日からハローワークに通ったが、求人案内にある「三十五歳まで」の壁は厚かった。

そこで派遣会社に登録。神奈川県にある家電メーカーの工場で、派遣労働者として働くことになった。

仕事はベルトコンベアで運ばれてくるかごの中に部品を入れていく「盛り合わせ」という作業。これを立ちっ放しで一日一〇〇〇回近く繰り返す。時給は一〇二〇円。派遣期間は一週間だった。

ところが四日目に突然、解雇を言い渡されてしまう。

「理由は五分の遅刻です。現場の工場へは毎日、最寄り駅からマイクロ

バスが出ていているんですが、その日は電車が遅れたために集合場所についてたときにはすでにバスが出た後で……。でも、そんな言い訳は通用しませんでした」

続いで派遣先は、東京・新宿の副都心。高層ビルにあるオフィスに事務機器を搬入し、中で机や椅子を組み立てるといふ作業だった。

作業は午後十時にスタートし、早朝六時まで、一時間の休憩を挟んでぶっ通しで行われ、

「終わった頃には膝はがくがくで、家に帰ったら立てなくなっていました」と言う水島さん。

翌日、派遣会社に給料を取りに行く、

「トレイにそのまま紙幣と小銭がジャラジャラと置かれているだけでね。封筒なんかありませんよ。しかも第一声は『お疲れさま』ではなく『明日も入れますか？』ですからね。

ああ、俺たちは機械の部品なんだ、って……」

水島さんが、「集合から解散までの時間は時給に含まれないんですか？」とたずねると、二十代と思われる担当者は無然とした表情になり、

「移動時間は換算されません！ 嫌なら、結構ですよ。代わりはいくらでもいるんですから」

と言いつつ放った。

結局、六〇〇〇円程度の日給で働いて、交通費と昼食代を引いて手元に残ったのは五〇〇〇円ちょっと。

拘束時間を含めると一時間労働で、時給にしたなら七〇〇円にも満たなかった。

「妻も子供たちを学校へ送り出した後、隣街のスーパーでレジのパートを始めたんですが、二人合わせて一八万円いくかどうか。そこから九万円分の住宅ローンを払ったら、とても

生活していけません」

そこで水島さんは自宅マンションを売却。子供たちが夏休みに入るのを待って、埼玉県郊外のアパートへ引っ越した。家賃は六畳一間と四畳半に一畳ほどのキッチンが付いて六万三〇〇〇円だ。

「残念ながら三年後、五年後を考えると余裕はありません。今はただ明日をどうやって生きていくかを考えたいと……」

子供たちもゲームが欲しい、とは言わなくなった。我慢している姿がいじらしくもあり、また水島さんを支える原動力になっている。

「女房や子供たちがいるから頑張れる。それがなかったら、とっくに心が折れていたかもしれせん」

一家の唯一の楽しみは月に一度ファミリールレストランで食事をすることだ。

「この日だけはね、遠慮しないで好

きなものを食べ！ って言ってるんです」

尊厳を奪い去る 現代の貧困

取材を始めてから半月後、ネットカフェで生活していた淳子さんから弾む声で筆者の携帯に連絡が入った。聞くと、居酒屋のホールのアルバイトが決まったという。

時給は九〇〇円で仕事は午後六時から深夜二時までだが、

「働きぶりによっては、長期採用も可能という話なので、しばらくは頑

張って何とかアパートに入る頭金を貯めるつもりです。先のことは、それから考えますよ」

彼女の現在の所持金はわずか八〇〇〇円。

「これで、ホームレスにならずにすみそうです」

そう語る彼女の声は、心なしか震えて聞こえた。

昨年、各都道府県の最低賃金が全国平均で一四円アップし、六八七円になった。この数字は〇二年以降、最大の引き上げ率なのだという。

しかし、実は日本の最低賃金はア

メリカと並び先進国中、最低水準だと言われる。そのアメリカでさえも現行五・一五ドル（約六二〇円）から七・二五ドル（約八七〇円）へ二年かけて段階的に引き上げる方向で、そうなれば日本は先進国で最下位となってしまふ。

わが国は憲法で、すべての国民が健康で文化的な最低限度の生活を営む生存権を保障している。

しかし、ワーキングプアによる貧困は確実に、社会生活を崩壊させ、さらに彼らの尊厳を奪い去ろうとしている。

金剛堂
カタログショッピング

配達から
セッティングまで
任せて安心
大手宅配業者
との提携で
実現!

お仏壇の
ご注文を
受付開始

詳しくはお問い合わせ下さい

カタログ
無料進呈中!
ご希望に
フリーダイヤルへ

金剛堂は「お布施のしるし」のある生活を
ご提案しています。

根付おしきみ 一本200円

0120-0700-42

受付時間(午前10時～午後6時まで
(日曜日は除く))

0120-62-7002

FAXで注文書を印刷できます
(24時間稼働中)

www.kongodo.com

インターネットでもご注文OK!

●商品は1週間以内のお届けです。

●送料別途500～800円

●クレジットカードも使えます。

●商品は全額後7日以内。
(送料お客様負担)

●商品の仕様上、おしきみのご返
品はご返却下さい。

●TEL:0566-3011 大阪市東淀川区4-77

KONGODO